

# ある群像

2021年12月号

公益社団法人 好善社

東京都目黒区中町1-7-4

〒153-0065

電話：03-3712-3845

Fax：03-3791-1150

2021年11月25日

発行 三吉信彦

編集 長尾文雄

川崎正明



多磨全生園・秋津教会のオンライン礼拝。2020年11月1日 撮影／藤原真実社員

## 好善社が今できること、 それは寄り添うこと

新型コロナウイルス感染症が世界に広まって、もう二年近くになります。ようやく日本では緊急事態宣言が解除されましたが、まだまだ多くの療養所では訪問が叶いません。

そういう中で、好善社の社員は各地の療養所の入所者にお便りを出して安否を伺い、電話や手紙で親しく交流を続けてきました。また時には先方から頂くお葉書に、大いに慰められ、励まされることもありました。「寄り添うこと」は、「寄り添われること」でもありました。感謝です。

一方、「コロナ禍で新しい交流の形も生まれました。多くの療養所教会は主日礼拝の中止を余儀なくされていますが、多磨全生園の秋津教会ではオンラインを用いることで、主日礼拝を続けることができました。礼拝堂に集まっている教会員の皆さんに、その日の担当牧師が自宅から説教するという形です。これはとても臨場感があって、ともに礼拝の恵みを味わうことができます。

ただ、療養所教会では高齢化が進んで会員が減少し、礼拝を中止したり、解散を選択した教会も出てきました。そういう教会の皆さんにも、私たちの応援メッセージを何とかお届けしたいと願っています。

代表理事 三吉信彦



日々新たに

石垣 信祐

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。

(コリント第二4章16節)

どんなに苦しくとも惨めでも、私たちは絶望し落胆しません。たとえハンセン病で、私たちの「外なる人」つまり肉体が、見る影もない手の施しようのないものに衰えて行くとしても、私たちの「内なる人」つまり靈魂は、苦しんだからこそ見捨てられたからこそ主イエスよ、あなたの目に止まり、あなたから友人としての慰め励まし労りをたっぷり受けているのでひるみません。心は日々新たにされているのですから、だから今、あなたの許に飛ばたき飛び立ちますと、先輩たちは明るく飛び立って行かれたのです。今年の恵生教会標語聖句は、先輩たちの信仰告白なのです。それをしっかり受け止め、私たちも先輩たちの信仰の足跡をしっかりと踏みしめて、後に続こうではありませんか。

(2002年恵生教会元旦礼拝説教より抜粋)



石垣正子篇  
『予定の道』



石垣信祐著『石垣信祐  
の聖書ものがたり』

石垣信祐(いしがき・しんゆう)

1926(大正15)年、沖縄県八重山列島の石垣島に生まれる。小学校5年生頃にハンセン病を発病。高等小学校を出て東京の多磨全生園に入所するが、病状の重さからすぐに石垣島に帰る。その後星塚敬愛園、沖縄愛楽園を経て敬愛園に再入所。職員から園名を島田八重夫と呼ばれる。1955年に正子夫人と結婚。1961年、長島聖書学舎第一期生として学ぶために長島愛生園に転園。卒業後1964年、社会復帰して上京。会社に勤務しながら夜間の日本聖書神学校を卒業して牧師に。在京中MOL(日本ハンセン病患者福音宣教協会)設立に協力した。さらに1968年から10年間JLM(日本キリスト教救癩協会)事務局長として勤務。退職後、1991年から11年間、星塚敬愛園恵生教会主任牧師に就任。2009年2月20日死去。83歳。遺骨は、故郷の石垣島の紺碧の海に散骨された。

上記の石垣牧師の説教は、療養所と社会でその生涯を送った自身の信仰告白である。その証は、正子夫人によって継承され、その説教は『石垣信祐の聖書ものがたり』(全27集)に収録されて発行。社会での経験を踏まえた説教内容は分かりやすい。また夫人の手書きによる表紙絵が素晴らしい。まさに石垣牧師の「いのちの証」としてのバイブルである。さらに、ハンセン病にかかわって生きた人々の言葉を紡ぐ『予定の道』を出版。正子夫人は「私達は、聖書にしがみつき一生懸命に生きて来た」と断言された。

# タイ国チャンタミット社とその活動

深まる好善社との交流

好善社理事 阿部春代

## チャンタミット社の成り立ち

タイ国のキリスト教NGO団体チャンタミット社は、1987年に創立され（創立者＝理事長：カンチャナ・コンスーブチャート医師）、2013年には財団法人の認可を受けました。

ハンセン病を病んだ人々とその家族の真の友となることを目的にし、「患者と家族が社会的平等を得て、全てのひと々と心身両面で双方が幸せに暮らせるようになる」を理念としています。対象はタイ国内13カ所の療養所とコロナー（回復者村）に住むハンセン病患者、また回復者とその家族です。（チャンタミット社＝以後、チ社と略称）

## 奨学金による青少年の育成

創立以前から東北にあるコロナーでの働き人（ワーカー）の育成を図り、村の中で育ち聖書学校で学ぶ青年たちに奨学金を支給し、学業終了後ワーカーとして派遣しました。

チ社創立後、まず始めたのはプラブラデーイン療養所の中の保育所と、全国修養会でした。修養会は全国のコロナーに住む後遺症を抱えた人たち、県

外へ出たことのなかった人たちが、年一回の再会を楽しみとしてきた長年にわたる人気の企画です。ワーカーとなった奨学生を東北部と東部のコロナーに送り、教会を支援する活動の中で、子どもたちへの「タッチ・オブ・ラブ活動」と保育所を始め、その数6カ所となりました。また、子どもたちの成長に合わせて2001年から始めた奨学金活動は、2017年末で総勢211名（延べ数1078名）、現在残り数名の奨学生の卒業を待つ状態です。

## 青少年ワークキャンプ開催

この奨学生を対象に青年リーダーの育成を目的に始まったのが、2005年からの「青少年ワークキャンプ」です。これを初回から担ってきたサクチャイ理事は「意図が分からないまま、考えることもなく続けてきた約10年だった」と回顧していましたが、2019年開催の第15回目が、これまで一番上出来のキャンプだったと喜び合いました。そして、青少年リーダーたちを主とした次代のワークキャンプをどう企画していくのか、第16回開催に期待を膨らませました。



タイ国青少年ワークキャンプ準備会（チ社事務所前・2018年6月）

2020年の活動報告書のチ社理事長から支援者へのメッセージは、「パデミックによって集会や様々な活動でお目にかかれないことはまことに残念なことです」の挨拶でした。コロナ禍によって、第16回ワークキャンプや第33回チャンタミット社修養会の開催も中止せざるを得なくなり、またチ社の職員の訪問はわずか3カ所でした。

## コロナーの一般村への移行

チ社は、ハンセン病対策の変化と周囲の社会環境の改善から、各活動を地元で自立出来るように配慮してきました。そして、プラブラデーイン保育所は2012年3月で閉鎖し、他の保育所

とタッチ・オブ・ラブ活動も徐々に減少し、今は2カ所のタッチ・オブ・ラブ活動を地元が担っています。

タイ国のハンセン病対策は1950年代から始まりました。1984年にWHOの多剤併用療法を開始して、10年後の1994年にはハンセン病がタイ国の公衆衛生上の問題ではなくなりました。この状況から、ノンソムブーン療養所が県立の病院に移行し、2005年に12カ所のコロナーも一般の村へ移行する話が始まりました。因みに、ノンソムブーンコロナーの一般村への移行調印式は2007年でしたが、移行が終了したのは数年前です。

### オンラインによる交流会の開催

2019年10月、第15回ワークキャンプ・リユニオンが日本で開催された直後に、指導者のサクチャイ理事が急逝、青少年キャンパーと自社にとって大きな痛手、悲しみでした。そのサクチャイ理事に協力してきた青年リーダーたちが主となって、オンラインによる定期的な会合を始めました。昨年の前半は、コロナ禍でキャンプは無理でしたが10月にリユニオンを開催、この時に日本の青年たちとオンラインによる交流が出来、2月の日本での青年リーダーたちのオンライン会合に各自がメッセージを送りました。

そして9月から、月1回のオンラインによる礼拝（金曜夕方）が始まりました。毎月のテーマを決めて、それにそう説教者の説教、参加者の話し合い

による司会・ゲーム・賛美などのプログラムに従って礼拝が行われ、30名以上が参加しています。

この礼拝の様子が掲載された自社の報告書を、カンチャナ先生がご覧になり「青年たちの活動が実施されることを願う」とコメントされ、この一言が青年リーダーたちを元気づけています。2回のワークキャンプを開催したアムナーチャルーンへの一泊二日の訪問が来年3月に計画されました。

### 高齢者と青少年への相談役に

自社が現在力を入れている活動は、高齢者への活動です。私は昨年1月に自社からの要請を受けて、ノンソムブーン教会の高齢者会への協力を始めました。その前後に別の場所にあるプラプラデーエンでの高齢者会に参加します。昨年はコロナの状況を見ながら、

アムナーチャルーン、セラブーム、ブットフォンの訪問を含めて5カ所に延べ21回の訪問をしました。

昨年末に、自社理事会からの「高齢者活動と青少年ワークキャンプに関する相談役」の依頼を受け、2月の自社理事会で私の受諾書が了承されました。それで、5月、8月、10月の理事会に私もオンラインで参加し、高齢者会での様子を報告しています。この理事会で、好善社のオンラインでの5月総会の顔合わせの様子を紹介したところ、早速、6月に自社と好善社の懇談会がオンラインで開催されました。

ワークキャンプ関連では青年たちのオンライン会合に加わり、聞き役に徹しつつ、時に刺激を与えられるように声掛けをします。

### 人と人との繋がり大切さ痛感

特に、私が月1回のノンソムブーン訪問で気づかされていることは、人と人との繋がりで、活動を続けるにはそこに関わる人たちとの良い繋がりを作ることがいかに大事であるかを痛感します。青年リーダーたちがキャンプを通してできた繋がりを切らさないようにと頑張っています。カンチャナ先生の一言の応答が、青年たちに活力を与えています。コロナ禍の中で、連絡を取り合うことの大切さを噛みしめています。



【上の写真：タイ国東北部のコロナーで高齢者会の昼食準備の筆者（左）】

## 好善社新社員紹介

# 今、出来ることを

三吉友恵

この度、二〇二一年四月に好善社に引き入れて頂きました。どうぞよろしくお願い致します。普段は奈良県にある日本基督教団高の原教会に通っています。「ハンセン病」との出会いには高生時代、聖書の授業が最初だったように思います。大学生時代に高の原教会を通じて、大島青松園、邑久光明園、長島愛生園の各療養所と教会をお訪ねする機会を得ました。

その後しばらく時を置いて、今度はタイ国でのワークキャンプに参加する機会を頂き、そこからより深くハンセン療養所と回復者の方々、彼らと関わる人々、そして好善社の働きに触れることになりました。私にとってこの出会い、交わりは何物にも代えがたい貴重なものとなりました。

## タイのワークキャンプに参加

一方で、ハンセン病回復者の方々も高齢になられ、これまで好善社が果たしてきた働きや交わりにも一定の区切りが予想される中で、新たに招いて頂いて歩みを為す時に何を基にしたいのかと戸惑う気持ちもありました。

そんな中、現在のコロナ禍における差別的言動などが報道されたり、自分の中にも潜む差別性に思いを馳せたりする時、これまでのハンセン病に関する悲嘆、苦闘を単に「忘れない」ということに留まってはいけないと強く思いました。「知ること・出会うこと」が、新たな悲しみや差別する人を生み出さない大きな力に繋がると信じ、「今・これから」出来ることを見つけていきたいと願っています。

諸先輩方のこれまでの働き、現場で感じられたことのの一つ一つに触れさせて頂き、困難にあたる時、私たちはどう手を取り合って道を切り開くのか、寄り添い励まし合う関係を持つのか、そういったことに目を向けたいと考えています。

世界全体でハンセン病自体が過去になりつつある今、これからの生きる未来世代にこの病とこの病が生んだ出来事の実を伝え、誰もが生きやすい未来を歩むためのアイデアを共に具体的に考えていきたいと思っています。こども、青年、就職、子育て、介護、高齢、各世代様々なライフステージにあつて、今の自分だから発見できる視点を大事に、国内海外それぞれに学びと出会いの機会を模索したいです。



2019年タイ国ワークキャンプにて (左・筆者)

## 「慰廃園」記念碑が完成 好善社事務所前の新栄教会の前庭に

設計者 加藤裕司 (好善社理事)

記念碑設計に際して、私が最も大切にすることは、この場所に「私立病院慰廃園」が存在した事実をどう表現するかでした。ひとつは、形状が誰にもが分かりやすいこと、次に現在礼拝が行われている新栄教会の教会堂が慰廃園の礼拝堂跡に建っていることです。そのために、何度か原寸大モデルをつくり、それに対する教会の皆さんのご意見を尊重しながら制作を進めました。今の教会のイメージを損なうことなく、十字架をモチーフとし、威圧感のない優しい形状としました。ふと通りかかった人がこの記念碑を見て、ここにキリスト教信仰に基づいたハンセン病の私立病院があったことを知ってもらえたらと思います。今回の記念碑作製に当たり、いろいろご協力頂いた新栄教会長老・中島耕二さんにこころから感謝いたします。

(写真は、2021年7月20日完成の記念碑)



# 好善社短信

## ◆「慰廃園」記念碑建立

今年の七月、念願の「慰廃園」記念碑が完成しました。場所は、現好善社事務所前の元慰廃園跡地にある日本基督教団新栄教会の敷地です（目黒区中町一六―一六）。慰廃園は、国のハンセン病対策がまだ定まらない時期、ハンセン病患者に安住と医療・療養の場を提供するために好善社が開設しました。一八九四年から一九四二年まで、四、一五九人が療養しました。コロナ禍が収まれば、記念式を同教会で開催する予定です。

## ◆日タイ合同理事会開催

九月二四日（金）午後、好善社とタイ国チャンタミット社の合同理事会がオンラインで開催されました。好善社側九名、チャンタミット社側九名。コロナ禍での双方の活動を報告し、今後の課題について協議しました。

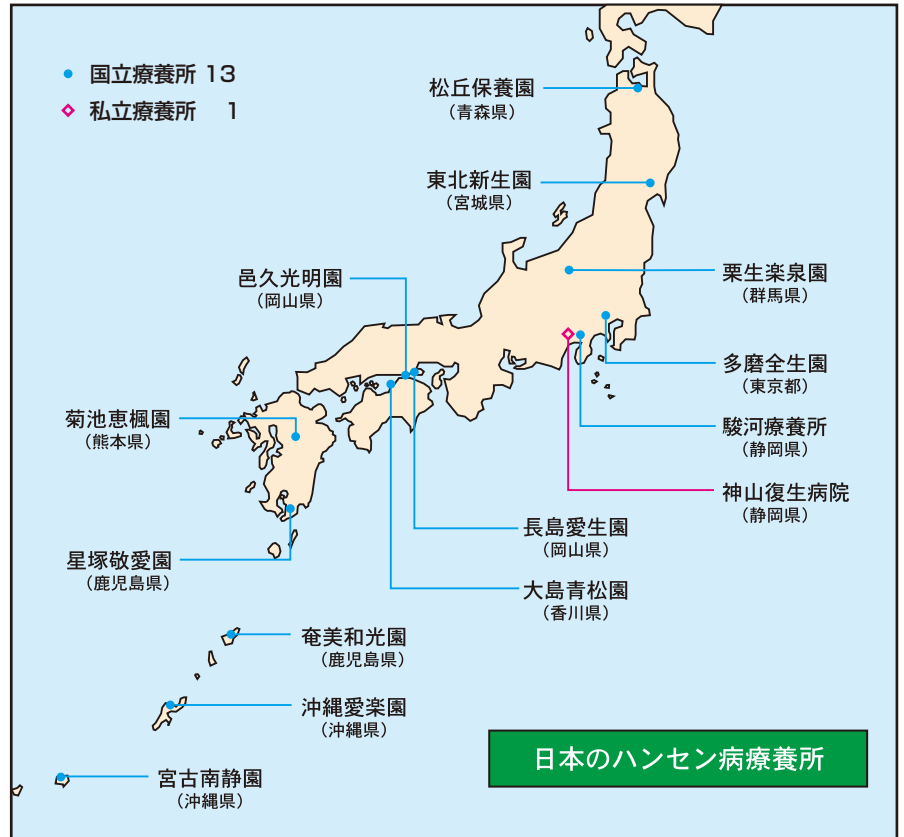
## ◆好善社社員のオンライン交流会

七月から三回、オンラインで社員交流会を実施して、相互の情報交換しました。

## ◆新しい社員の入社

二〇一五年の渡辺圭一郎社員の入社から六年ぶりに若い二人が入社しました。工藤尚子さんと三吉友恵さんです。今後の活躍を期待します。本誌六頁に、三吉友恵社員の紹介が掲載されています。工藤さんは次号で紹介しています。

国立療養所 入所者数 2021年5月1日現在			
	男	女	計
松丘保養園	22	36	58
東北新生園	14	30	44
栗生楽泉園	26	26	52
多磨全生園	55	71	126
駿河療養所	24	23	47
長島愛生園	67	58	125
邑久光明園	29	41	70
菊池恵楓園	67	97	164
星塚敬愛園	36	53	89
奄美和光園	5	14	19
沖縄愛楽園	53	59	112
宮古南静園	25	25	50
21年5月計	447	554	1001
20年5月計	500	591	1091
前回比	-53	-37	-90



2021/5/1<全療協・提供

12月・クリスマス募金のお願い  
国内とタイ国のハンセン病に関わる好善社を支えてください！

2021年度募金（会費・寄付）目標額 1,000万円

### ハンセン病問題の今

日本国内ハンセン病療養所は、2021年5月1日現在の入所者数1,001人、平均年齢87.0歳となりました。急速な高齢化の終焉期を迎えています。

ハンセン病問題は、「らい予防法」廃止、「国家賠償請求訴訟」原告勝訴、「ハンセン病問題基本法」成立、そして1昨年「ハンセン病家族訴訟」原告勝訴による「ハンセン病家族補償法」が成立しました。しかしなお、社会に残る偏見・差別の解消には至っていません。好善社は次のような活動を行っています。

#### 国内ハンセン病啓発・支援事業

- ◆全国13ヵ所の療養所訪問・交流活動が続ける。
- ◆講演会・出版・啓発活動 偏見差別解消のために。
- ◆回復者・入所者のいのちの尊厳が保障され、その人たちの名誉回復、ハンセン病問題の最終的な解決の実現を願っての支援と啓発活動が続ける。

#### 2021年度収支予算（抜粋・単位円）

療養所訪問・広報宣伝費	5,530,000
タイ国支援事業・チャンタミット社支援	1,500,000
・専門家派遣（看護師）	2,200,000
・現地調査・交流費	2,000,000
事業管理費	7,020,000
収入 会費	3,700,000
寄付	6,400,000
雑収入	5,000

### タイ国ハンセン病支援事業

好善社は1982年からタイ国のハンセン病に関わり、阿部春代社員（看護師）を東北部の病院へ派遣し、2019年に29年間の働きが終了しました。

しかし、好善社のタイ国での事業支援はなお継続し、タイ国のハンセン病支援団体チャンタミット社の運営を側面から支援し続けています。回復者の子どもたちへの奨学金活動にも関わり、2005年からはこの奨学生を対象としたワークキャンプが始まり、15回を数えています。現在、コロナ禍で中止していますが、青年リーダーたちは、終息後の活動再開を考えています。

タイ国滞在を続けている阿部看護師の現在の活動は、高齢者の健康管理の支援に力が注がれています。そのために

**今年度570万円の活動費が必要です。**



タイ国で活動する阿部看護師の日々

2021年11月25日

公益社団法人 好善社 代表理事 三吉信彦  
理事 棟居 勇 朝倉秀之 川崎正明  
加藤裕司 阿部春代 乗 圭子  
本行輝雄